

# 随想「甘え」が日本を滅ぼす

## どうすれば強い日本を作れるのか

弁護士 金子博人

### 第30回 変わりたいのに変わらないのはなぜか (その3)

#### 「ひらめき」を尊重できないようでは変わらない

#### 1. 「ひらめき」を嫌う社会

ひらめきや独創は、それが新しいものを作り、起爆剤となって社会が変わる。このメカニズムが評価される社会は変われる。しかし、「甘え社会」はこのメカニズムが嫌いだ。独創力とは、それ自体今までと違うものを作り出すものであり、変化を生じさせる。それは「和」を乱すものであり、好まれないのだ。

独創的な人間を評価すると序列が入れ替わり、「タテ社会」の秩序が崩れるので、年功序列社会は独創性を嫌い、それを無視することと安定しようとする。「タテ社会」は、巧妙に独創的な人間を排除しようとする。

日本でひらめきや独創が嫌われるという現象は科学技術に限られるわけではない。企業、社会、国家、文化、芸術など、あらゆる分野で起こっている現象である。

#### 2. 青色発光ダイオードLED事件が語るもの

中山修二は日亜工業で青色発光ダイオードLEDを発明した。その後彼はカリフォルニア大学サンタバーバラ校の工学部教授に転出した。そして、自分が発明した青色発光ダイオードLEDに対し職務発明としての正当な対価が払われていないとして、2004年1月30日に訴訟提起した。

一審の東京地裁は、会社の利益を1208億円と認定し、職務発明の相当の対価はその半分の604億円とした。しかし、会社は控訴し、2005年1月12日、東京高裁で和解が成立した。その内容は、貢献度を5%として対価を6億円とし、遅延損害金含め8・4億円を会社が払うというものであった。

事実関係は同じであったが、一審は貢献度50%、控訴審はわずか5%。実に大きな違いである。これは、発明という一点に対する評価の違いであり、実に興味深い。

会社側の主張は、中村の発明は会社の経営資源を使ったものだし、会社が多大のリスクを負っていたというものだ。ただ確かなことは、その核心となる発明、つまり、無か有を生じる「閃き」というべき部分は、中村教授によるものであった。

この問題は興味深いので、私は色々な機会に人の見解を聞いてみたが、サラリーマンは概して中村教授に厳しかった。「自分ひとりで発明できたわけではないだろう」という論調だ。一サラリーマンが604億円もの金額をもらうこと自体が異常だという感情論もかなり強かった。

しかし、日本で中村教授の判決が出る少し前、アメリカの裁判所では、発明の対価として医師に1

400億円を支払えという支払い命令が出ていた。東京地裁判決の金額は、世界レベルではさほど特異ではないのだ。

確かに現代は、エジソンの時代のように、個人が自分だけで大発明をすることは不可能である。当然、それを可能にしたプロジェクトも必要だ。この点では日米変わらない。違うのは、無から有を生じるという「閃き」に対して、それに大きな価値を置くか、背後の組織力に価値を置くかの違いであり、この相違は文化の衝突とでもいうべきものである。

#### 3. タテ社会は発明を封印

2002年、田中耕一さんがノーベル化学賞を受賞した。本人も周辺も全く予期していなかった受賞だったようだ。田中氏は、受賞当時島津製作所の主任だった。世界レベルではノーベル賞の価値があっても、日本での価値評価は主任レベルだった。会社としては、ノーベル賞の候補になっただけでも知らなかったようである。

これは日本のタテ社会とは何かを如実にあらすものだった。島津製作所の年功序列の中では、ノーベル賞に値する発明も評価の対象外なのだ。年功序列は年功による序列で、人の本当の成果を無視することで成り立つが、その典型的な例となってしまう。

もつと驚いたのは、その後の日本国内での反応だ。田中さんの謙虚な対応から、「サラリーマンの鏡」と評価はされたが、人の実績が評価されないという日本社会の問題点を指摘する者はほとんどいなかった。

東北大学の西澤潤一教授は、光ファイバーの重要な基礎技術の発見者だ。しかしその発明は、最初に発表した日本国内では無視された。が、改めて米国の科学雑誌に発表したところ、それを見たベル研究所の研究部長がわざわざ仙台に会いに来たという（同教授「技術大国日本の未来」朝日文庫）。

世界で高く評価されたのに、なぜ国内で無視されたかと言えば、東北大は東大などに比べると格下で、格下の発見など評価しないというタテ社会の論理が典型的に働いたからだ。

その後光ファイバーを研究する日本の学者が、朝日新聞の「人」欄に、「我々は西澤の仕事をみて始めるのでなくアメリカで研究しているのだからだ」とわざわざ断り書きをしていたそうだ。

戦前、同じ東北大の八木秀次教授は八木アンテナを発明した。リーダーの開発に重要な役割を果たすものだった。日本軍がシンガポールを占領した時に、変な形のアンテナを発見し、「これは何か」と尋ねると、英軍兵士は、「ヤギ

アンテナ」と答えた。「ヤギとは何か」とさらに問うと、「ヤギとは日本人だったと思うが」との返事であった。この変なアンテナは、実は八木教授の発明品であったのだ。

日本では見向きもされていなかった八木アンテナが、イギリスで評価されて実用化され、しかも、発明者に敬意を表して「ヤギ」アンテナと呼ばれていた。

イギリスにとっては東洋の一研究にすぎないのに、優秀とあればそれを採用する。これも西沢教授の著作にでてくる話だ。他方、日本軍は、敗戦までリーダーの開発の遅れに悩まされた。これはタテの序列でしか人の成果を評価できない日本社会の限界であろう。

#### 4. 日本はノーベル賞が少ないのはなぜか？

ノーベル賞の受賞者数をみると考えさせられる。ノーベル賞受賞者は、今までの累計で約800人だ。内訳は、米約300人、ドイツが約80人、フランスが約50人だが、日本はわずか18人である。日本が人口でドイツやフランスの2倍であり、世界第二位の経済大国を半世紀近く維持してきたことを考えると、いかに少ない。「関心」が尊重されないからであろう。科学技術の世界で「タテの序列」の頂点に立つのは、東大、東大助

手、助教授を経て、東大教授になるコースだったであろう。しかし、ここからは、ただの一人のノーベル賞受賞者も出していない。「タテの序列」の頂点は、独創性の頂点ではないようだ。

#### 5. 本格的な研究者の成り手がいない

指導教授と弟子の関係は典型的なタテ社会だ。この教授と弟子の関係は生涯続き、教授は、人事権と発表権を握り続けるのだ。指導教授にかわいがられないと就職のポストもないし、学会や有力な学術雑誌に発表するチャンスも来ない。しかし、このように情実が支配するようでは、本当に優秀なものはない。

さらに、博士課程の学生は留学しながらないことも問題である。海外に出て幅広い研究をし、海外に多くの人脈を持つべき時に留学しようとしれないのだ。この傾向は上位とされる大学ほど顕著だという。

なぜかと言うと、一旦留学するとキャリアパスから外れてしまうからだ。帰国してせっかくの留学成果を活用したいのだが、日本のタテ社会ではその成果を尊重するどころか逆に異分子扱いとなり、受け入れてくれるところが無くなるのだ。さらに問題は、留学生が少ない

だけではなく、国内の研究者の数のものが少ないのである。要するに、なり手がいないのだ。人口1000人当たりの大学院生の数は、米約8・53人、英約9・36人、フランス8・40人、韓国は5・98人だが、日本はわずか2・04人だ（文科省、「教育指標の国際比較」2009年版）。しかも、この少ない研究者志望の受け皿も限られている。日本のオーバードクターの問題は深刻だし、慢性化している。

人の本当の才能や実績を評価するのが嫌いな日本社会では、若者は本格的な研究者になろうとしないし、社会は数少ない希望者が活躍する場面を奪っている。こんなことが続くようでは、日本の将来は無いというべきであろう。



金子博人  
(かねこひろひと)

金子博人 法律事務所。弁護士。早稲田大学法学部卒業。同大学院修士課程（商法）終了。1977年4月弁護士開業。国際旅行法学会（IFTA）会員。大東文化大学法科大学院、日本大学法科大学院講師。市場取引監視委員会委員（東京工業品取引所）。日本フライムリアルティ投資法人執行役員。



## 金子博人法律事務所

〒104-0061 東京都中央区銀座8丁目10番4号 和孝銀座8丁目ビル7階

<http://www.kaneko-law-office.jp>

掲載内容の無断転載・転用を固く禁じます。